

## 第2回 「実践例（その2）と評価の仕方」

東京都板橋区立赤塚第二中学校 主任教諭 中野英水

### 1 はじめに

3月末に新しい学習指導要領が公示され、さらに6月には解説も示された。ここでは、いわゆる「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習内容が示され、それに合わせた適切な評価も求められている。生徒の学びを司る現場の教員が、新しい学習課程とそれに沿った新しい評価方法について研究する必要性も増していると考ええる。

そこで今回は、読者からの要望も多かった別の実践例を紹介しながらパフォーマンス評価の実践を深めるとともに、ルーブリックにもとづいた評価例を通して、評価の仕方についても示していきたいと考える。

### 2 パフォーマンス評価を活用した実践(2)

今回の事例は、地理的分野大項目1「世界の様々な地域」中項目ウ「世界の諸地域」より「ヨーロッパ州」における実践例である。今回の実践例では、「ヨーロッパ州の地域的特色を捉え、ヨーロッパの統合がよりよい地域をつくるための選択であったことを考えると同時に、統合の利点や課題を多面的・多角的に分析して、よりよいヨーロッパ州の在り方を他者と協働しながら主体的に考え、地域の発展に参画する態度を養う」ことを単元の目標とした。なお、本単元は帝国書院の教科書『社会科 中学生の地理』p.50～63にもとづき、全5時間で構成した。

前回も示したが、パフォーマンス評価とは、「知識や技能の活用を含めた思考力・判断力・表現力などを総合的に評価する評価方法」である。つまり、その単元で学習した知識や技能をフル活用して思考、判断、表現する学習課題を評価するという単元全体の総合的な評価である。それゆえ、評価だけを個別に考えるのではなく、単元全体の関係性を意識したものでなければならない。筆者もこの点を重視し、単元構造の作成には力を入れている。前回の南アメリカ州の事例と同様、単元構造とパフォーマンス評価との関係に注目しながら、実践例をご覧いただきたい。

#### ヨーロッパ州・単元指導計画

第1時	【ヨーロッパ州の自然環境】 自然環境を中心に大観し、小さな国が集まった地域であることを理解する。
第2時	【ヨーロッパ文化の共通性と多様性】 大きくは共通しているが、細部で違いのある地域であることを理解する。
第3時	【ヨーロッパ州の統合】 戦争の反省を生かし、よりよい地域をめざして統合を選択したことに気づく。
第4時	【ヨーロッパ州の産業と課題】 農業や工業の特色を理解し、東西格差が拡大していることに気づく。
第5時	【よりよいヨーロッパ州をめざして】 これまでの学習成果を整理して、よりよいヨーロッパ州の在り方を考える。

単元の構造（p.27下）は、第1時から第3時までの学習で、ヨーロッパ州が地理的、歴史的な特色から、戦後のよりよいヨーロッパ州をめざして統合という道を選択したことに気づかせ

るというもので、ここまでを受けて第4時、第5時は統合の成果と課題を明らかにし、さらなる課題解決に向けて、それまでの学習成果を活用しながら考える時間を設定するという2段階構造とした。なお、筆者の実践では授業時間の関係上5時間で終わったが、時間が確保できる場合は第6時にまとめの時間を設定し、学習したことを整理させてもよい。

### 第5時の学習計画

導入	・前時までの学習内容を振り返り、学習の成果をワークシートの構造図(p.28上)に整理する。
展開	・さまざまな資料(※)を活用し、EU統合が進む中で発生してきた課題を分析する。(個人)【課題①】 ・分析をもとに、よりよいヨーロッパ州に向けての在り方を考え、提言書を書く。(グループ・個人)【課題②】
まとめ	・提言書の内容をグループで共有し、さまざまな視点をもつ。 ・生徒の考えを発表させ、共有する。

※ここで活用した資料は前時までのワークシート、教科書や地図帳、資料集の資料のほかにイギリスのEU離脱についての賛成派、反対派、中間派の意見を掲載した新聞記事などを提示した。

### パフォーマンス課題

EU本部は、6月にイギリスでEU離脱の是非を問う国民投票がなされ離脱が残留を上回った結果を受け「よりよいヨーロッパをつくる委員会」を設置しました。あなたはこの委員会のメンバーに選ばれ、ヨーロッパの地域状況、ヨーロッパ統合への思いや経緯、ヨーロッパ統合が進む中で発生してきた課題などをふまえて、よりよいヨーロッパの在り方をEU本部に提言することになりました。

#### 【課題①】

そこで、あなたは委員会が収集してきた資料を活用して、ヨーロッパ統合が進む中で発生してきた課題について調査・分析(読み取り・読み解き)をして委員会に報告します。その報告のための課題分析シートを作成してください。

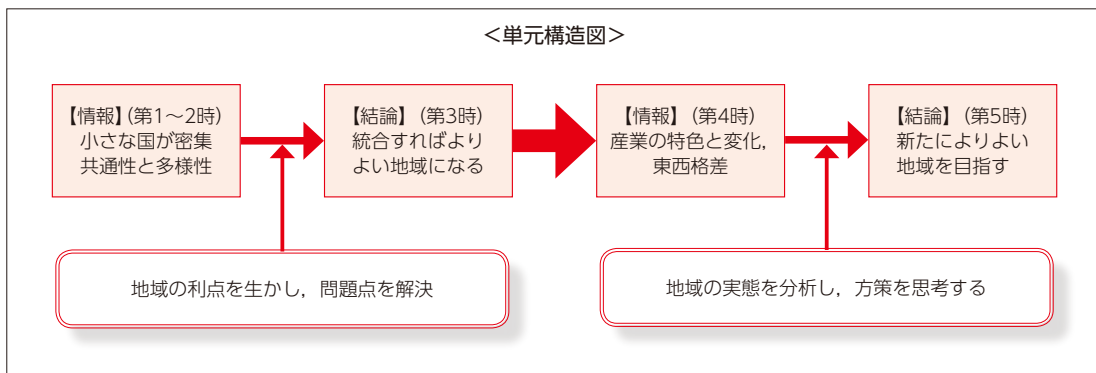
#### 【課題②】

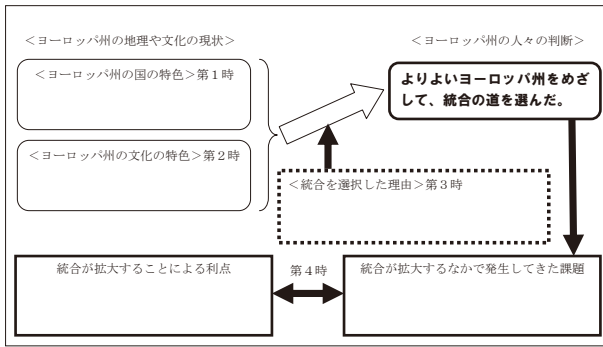
「よりよいヨーロッパをつくる委員会」が召集され、集まった委員会のメンバーはグループに分かれて、各自が分析した課題分析シートの内容を報告し合います。また各委員がこれまで身につけてきたヨーロッパ統合の思いや経緯などについても討論します。そして、委員一人ひとりがよりよいヨーロッパの在り方をEU本部に提言します。あなたが考えたよりよいヨーロッパの在り方をキャッチフレーズに表し、その内容を提言書に書いてください。

### ルーブリック(課題②に対して)

A	B評価の評価項目を満たしつつ、1つ以上の点について、とくに優れていると判断されるもの。多面的・多角的に深く考えられていると判断されるもの。
B	以下の評価項目について、おおむね満たしていると考えられるもの。 ①よりよい地域をめざす持続発展的なものである。(持続発展性) ②これまでの学習成果が生かされているものである。(既習事項の活用) ③資料を活用し、その読み取りを生かしているものである。(資料の読み解き) ④根拠を示しながら、自分の考えを主張しているものである。(論理性)
C	B評価の評価項目について、とくに不十分と判断されるものが含まれていたり、全体的に不十分と判断されるもの。

#### <単元構造図>





<第5時ワークシートの構造図>

### 3 評価の仕方について

ヨーロッパ州でのパフォーマンス課題に対するルーブリックを用いた評価は、課題②で行った。先行研究では複数の教員により検討会を開いて評価を行う方法が示されている。これはより客観性や多角性をもつ理想的な方法であるが、多忙な校務に追われる実際の学校現場の事情からはなかなか難しい。そこで筆者は授業者1人での評価を行っている。ただ、1人の評価であってもなるべく客観性や多角性をもたせるために放課後の教室で机を以下のような形で配置し、ルーブリックに合わせて縦横双方向から確認しながら評価している。

	A評価	B評価	C評価
1組	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
2組	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
3組	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
4組	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
5組	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>

評価したものを机に置き、再度縦横から検証

以前、美術の教員が作品評価をしている場面を見たことがあるが、それはまさにこのような

方法であった。評価したものを机に置きながら、縦や横から何度も確認していた。学校教育法第30条2項で「習得－活用－探究」が謳われているが、パフォーマンス評価の導入は、社会科がまさに「学習した知識や技能を活用して現実的な社会問題の把握、解決を思考し、それを自分の言葉で表現する」という「実技教科」となったことを意味しているのではないだろうか。

つぎに評価の事例であるが、ヨーロッパ州のパフォーマンス課題②における生徒の回答例を以下に示しながら、実際の評価について述べていく。

#### A評価の回答例

「共通性を大切に。国境をこえてのつながり」  
EUでは、国境をこえたつながりを深めることができるという利点がある。その利点を生かし、共通性でまとめることができるだろう。イギリスの離脱賛成派は、独立国の権利が認められていないことを挙げているから、深くしほらない方がよいと思う。ECのころの経済に重点を置いていたときを思い出し、話し合えばいい。また経済格差の問題では、フランスなどが所得の低い国々に教えに行ったらよいと思う。EU加盟国は、国境の行き来ができるから、便利でいいし、工業化の遅れを取り戻せれば、所得も増えるかもしれない。また、最低所得をそろえれば、国々も頑張るし、格差もだんだん小さくできると思う。

この事例は、B評価の4つの観点（持続発展性、既習事項の活用、資料の読み解き、論理性）の4つの観点を満たしつつ、A評価の観点である「多面的・多角的に深く考えられていると判断されるもの」という観点を満たす回答と判断した。A評価まではどうかと考える読者もいらっしゃるだろうが、中学1年生の2学期の発達段階で、EU統合問題の解決といった高度な内容に挑戦しているということを考慮してA評価としている。これがもし3年生の2学期であるならばB評価であったかもしれない。このよ

うにループリックには示されない、発達段階の考慮や課題の難度なども評価基準に含めながら評価することが大切である（課題作成時も考慮する）と考える。このあたりについては、評価するときに行う縦横の確認の中で反映させたい。

## B 評価の回答例

「小さな国を大きな国へ！」

まず、ヨーロッパ州をよりよい地域にするためには、国どうしがもっと協力し合うことが大切だと思う。そのためには大きな国の意見ばかりではなく、小さな国の意見それぞれを尊重し合い、たくさんの意見を集めることが重要だと思う。小さな国々は人口も少ないので、小さな国どうしがまとめて小さな国の中でもたくさんの意見が集められるよう、小さな国を大きな国にすることが必要だと思う。

この回答例は、発達段階の考慮や課題の難度などを含めて判断すると一定のレベルには達しているものの、先ほどのA評価のものとは比べると「1つ以上の点について、とくに優れていると判断されるもの。多面的・多角的に深く考えられていると判断されるもの」というA評価の基準にまでは達していないと判断した。（B評価でもかなり上位ではあるが。）

今回の課題解決の中では、国としての利益とヨーロッパ全体としての利益とのギャップが争点となっていた。これはこの授業で提示したイギリスのEU離脱についての賛成派、反対派、中間派の意見を掲載した新聞記事などの資料からの読み解きが大きく影響している。地域統合という政治的な要素を含む課題であるので公民的分野を学習していない中学1年生の回答はつたないところが多かったが、逆に政治的な要素を知らないからこそ、学習した地域的特色を生かしながら思考することができたと考える。実際に生徒の回答では地域統合を否定するものではなく、回答例のように統合の仕方を工夫してい

くというものが多かった。地域的統合に向いているというヨーロッパ州の地域的特色をとらえられているからこそこの回答であると考えられる。

このようにパフォーマンス評価は単なる思考力をはかる学習評価ではなく、「知識や技能の活用を含めた思考力・判断力・表現力などを総合的に評価する評価方法」であるということを経験して強調したい。だから、**学習課題を変えただけでは効果を十分に発揮しない**のである。授業者はどのようなパフォーマンス評価を行うか（パフォーマンス課題とループリックの設定）を単元や本時の目標に合わせて設定し、そこにたどりつくような単元構造を逆向き設計で考える必要がある。目標－指導－評価の一体化を意識した単元構造も意識しなければならない。

さらに言うならば、このようなパフォーマンス評価は、新しい学習指導要領解説で示されている「何を知っているか・何ができるか（個別の知識・技能）」を習得・活用し「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」を問う評価方法なのである。そしてそこにESD等の視点を加えると「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（主体性・多様性・協働性・学びに向かう力・人間性等）」を養う評価となっていくのである。

## 4 おわりに

前回の南アメリカ州、今回のヨーロッパ州と世界の諸地域の実践例を紹介したが、日本の諸地域の実践例も見たいとお思いの方は、帝国書院発行『中学校 社会科のしおり』2016年度2学期号をご覧ください。p.26から北海道地方の実践例が掲載されている。ALの実践例として紹介したが、パフォーマンス評価についても記述しており、何かの参考になれば幸いです。帝国書院のHPよりご覧いただけるのでアクセスしてみてください。